
光の中に

一色水生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の中に

【Nコード】

N1762C

【作者名】

一色水生

【あらすじ】

幼い頃を思い出して、今を泣くんだ・・・

いつの間にか二年が経っていた。私が中学を卒業して、彼と、五年間の私の片思いの相手、弓削^{ゆげ}さんと別れて二年。

門出の日は何ともあっけなく、私は泣く事もなく、ただ呆然と卒業証書を手にした。

彼は笑っていた。

確かにあの日、彼は笑っていたのだ。

あの、太陽の光さえも跳ね返すようなまぶしい笑顔を、惜しげもなく振りまいていたのだ。

そう、私はそれを見て笑ったのだ。

ただ、笑うだけ。

私がしたのはそれだけだった。

高校の、それも進学校の三年目というのは、（何事もなく進級すれば）なかなか忙しいものである。

例えば、土曜日の朝、11時に目覚めるような事は決してなくて、朝から登校して、みっちり5コマの課外授業を受けなくてはならない。

けれど、低血圧とはなかなかきついもので、朝が苦手な私は、遅刻など日常茶飯事だった。

『今日は、家でゆっくりしよう』

そう決めるのにさほど時間はかからず、私の中で今日は学校などないものとして扱われた。

窓を開けると、夏の匂いがした。

生ぬるい風の中に、どこか懐かしくて泣きたくなる様な、そんな香りが混ざっていた。

六月も下旬となれば既に夏。

少し温度は低くても、空の色も濃くなり、日差しも強い。

昨日淹れておいたマスカットティーを冷蔵庫から取り出し、グラスに注ぐ。

赤茶色に染まったグラスが、窓からの日差しを受けてキラキラと光る。綺麗だ。

隣のマンションから音楽の音が漏れている。

ミスチル。

BGMには丁度良い。

夏の空が広がっている。

窓のそばに腰を下ろして、貰い物のクッキーを頬張る。

“やわらかい風が吹いたら”

このCD私も持つてるな。

そんな事を考えながら、音楽に耳を傾けた。

空は青い。雲が白い。風も吹いて、太陽が輝いている。

こんな日には、思い出すんだ。

彼の事を。彼とじゃれ合って笑っていた自分の事を。

弓削くんは、初恋の人だった。

そして、ファーストキスの相手でもあった。

彼とは、小中と同じ学校で、七年間クラスメイトだった。

私は、小学四年生のとき初めて彼に恋をした。

それから六年生のときに、彼とキスをした。

中学二年でクラスが始めて離れて以来、少し距離が出来たが、私の想いは止まらずに、結局は高校に入って二年と二ヶ月が過ぎた今でも彼に片思いをしているのだから救いようがない。

告白はできなかった。

弱虫。と一言で片付ける事も出来る。

はたまた、プライドが高くて・・・と長ったらしく言い募ることも出来る。

しかし、最後には「告白できなかつた」という事実だけが残るのだ。高校に入ってから、殆ど会っていない。中学の頃も今も、彼も私も、お互いそれなりに異性との付き合いはしている。

彼に至っては、季節の変わり目に衣替えする様に女の子を代えているという噂を耳にした事もある。

私は、派手にモテると言うこともなく、ただ思いを告げられた中から無難な人を選び、無難な付き合いをするという程度のことを何度か繰り返していた。

けれども、やっぱり私は彼らと恋愛をする事は出来なくて、そのままずると弓削くんへの想いを温め続けているのだ。

輝くマスカットティーを口に含んで飲み込む。

マスカットの香りが口に残る。

あの頃は幸せだった。弓削くと、その他大勢の友達と、走り回って、笑い合って……

窓に背を向けると、フローリングに私の影が映った。

『光の中に……』

弓削くんが言っていた。

小学校の頃、弓削くと二人で影おくりをした。

国語の教科書にのっついていて、それを二人で試そうとしたんだ。

グラウンドに映る、手を繋いだ少年少女の影を瞬きをせずに十秒見つけた。

二人で一から十まで数えて、雲一つない空を見上げたとき、私たちは低く声を上げたのだ。

真っ青な空には、確かに影が送られていた。

手を繋いだままの二人が、ぼうつと空に浮かんでいたのだ。

それは意外にも、くつきりと力強くて、私はちかちかする目を必死に開けて瞼の裏に焼き付けたのだ。

その時だった。

弓削くんが呟くように言ったのだ。

「光の中に僕らが居るね。」

私は、彼の手を握り直して頷いた。

手にはじんわりと汗をかいていた。

彼が私を見ているのに気が付いたのは、完全に影が消えた後で、私が彼を見たときだった。

彼の大きな瞳には、小学生の私が映っていて、きっと私の瞳には小学生の彼が映っていた。

不意に彼が近づいてきて、私と彼はキスをした。

私は目を開けたままで、回転の遅い頭で考えて、それがキスだと気づいたときには、既に彼の唇は私のそれから離れた後だった。

ただただ呆然と彼を見ていた。

穴が開くほど　　とはよく言ったものだ。

真顔のままの彼は、ニコツと微笑んで

「ファーストキス」と言った。

今思っても、不思議な人だった。

いつもは単純な男の子の様に振舞っているのに、いつも気が付けば、別人に変身していたりするのだ。

時には、紳士に。時には、悪戯坊主に。そして時には……
考えてみると、私はそんな彼に恋をしたのだ。

そして、そんな彼と彼に恋する私を思い出しては幸福な時を過ごすのだ。

そしてある日、私は気づかされるんだ。

大人になった私その日も恋しく想っているのは、彼ではなく、彼と共に過ごしたあの幼い日々なのだ。

「光の中に・・・」

ポツリと呟いて今の自分を泣いてみる。

そう。光の中に、

小学生の私と、小学生の彼。

光の中に二人は居る。

今もしつかりと手を繋いで、立っている。

真っ青な空の、雲一つない空の、光で満ちた空気の中に、私たちは
浮かんでいる。

そして私は涙を流す。

幾つもの影に見えなくなつた自分を探して
幾つもの年月に見えなくなつた彼を探して

(後書き)

まず、この小説ともいえない読み物を読んでくださって有難うございます。

実は少しだけ私の実体験です；恥

恋に恋とはこういう事を言うんですよね；

慣れもしないのに、小一時間程度で下書きもなしに書いてしまったもので、滅茶苦茶な文になっているとは思いますが、それでも、最後まで読んで頂けたのなら嬉しいです。

本当に有難うございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1762c/>

光の中に

2010年10月24日13時50分発行